

教科目名 電磁気学 I (Electromagnetism I)

学科名・学年 : 電気電子工学科 3年

単位数など : 必修 4単位 (前期2コマ, 後期2コマ, 授業時間 85.5時間)

担当教員 : 高橋 徹

授業の概要			
電気電子工学の基礎学問の一つとして電磁気学を学習する。まず、クーロン力、電場、ガウスの法則、電位、静電容量、誘電体について学ぶ。続いて電流による磁場、電磁力、電磁誘導、インダクタンス、磁性体について学ぶ。最後に Maxwell の方程式について学び、電磁気現象を統括して把握する。			
達成目標と評価方法			大分高専目標 (B2)
(1) 電磁気現象を電場と磁場で把握する電磁気学の方法を理解する。(定期試験とテスト)			
(2) 簡単な電磁気的状況を電磁気学のモデルを用いて分析あるいは計算できる。(定期試験とテスト)			
(3) 演習問題を通して理解を深めるとともに、継続的な学習ができるようにする。(課題)			
回	授業項目	内容	理解度の自己点検
1-3 4-7 8-11 12-16	[1]電荷と電気力 [2]電場とガウスの法則 [3]電位 [4]種々の帯電体	[1]電荷の間に働く電気力(クーロン力)について学ぶ。摩擦電気、電荷、導体と絶縁体、静電誘導について理解する。 [2]電磁気学の中心的概念の一つである電場の概念を導入し、ガウスの法則を学ぶ。電場の合成、電気力線について理解する。 [3]単位電荷あたりのエネルギーに対応する電位の概念を導入する。電場と電位との関係を理解し、その計算法を学ぶ。連続的な電荷分布による電位・電場を理解し計算する。 [4]種々の帯電体によって生じる電場と電位を考察する。物質中の電場、導体中の電場、電気双極子について理解する。	【理解の度合い】
17	前期中間試験	試験範囲は原則として第7週までの内容とする	【試験の点数】 点
18 19-22 23-27	解答と解説 [5]静電容量 [6]誘電体	[5]電場が蓄える電気エネルギーについて学ぶ。静電容量の概念を導入し、様々の状況における静電容量と電位、電場との関係を導出する。 [6]誘電体について学び、境界条件について理解する。	【理解の度合い】
28	前期期末試験		【試験の点数】 点
29-32 33-36 37-40 41-44	[7]電流 [8]電流と磁場 [9]電磁力 [10]電磁誘導	[7]電流密度と電荷密度との関係を導出する。 [8]電流のまわりに生じる磁場について学ぶ。磁場はビオ・サバールの法則によって求められ、アンペアの法則と磁場に関するガウスの法則によって基礎づけられる。磁場の計算を学ぶ。 [9]電流および運動する電荷が磁場から受ける電磁力(ローレンツ力)を理解し計算する。 [10]磁場が時間的に変動したり、回路が磁場中を運動したりすると誘導起電力が生じる。この現象はファラデーの法則によって定式化される。	【理解の度合い】
45	後期中間試験		【試験の点数】 点
46 47-50 51-54 55-57	解答と解説 [11]インダクタンス [12]磁性体 [13]Maxwell の方程式	[11]磁場が蓄える磁気エネルギーについて学ぶ。自己インダクタンスと相互インダクタンスの概念を導入する。導線やコイルの様々の配置に対する磁場、磁束、誘導起電力を導出する。 [12]磁性体は強磁性体、常時生体、反磁性体に分類され、透磁率によって特徴づけることができる。強磁性体の磁化に伴うヒステリシス現象、磁気回路、境界条件について理解する。 [13]変位電流を導入してアンペアの法則を修正し、電磁場現象を記述する Maxwell の方程式について理解する。	【理解の度合い】
58	後期期末試験		【試験の点数】 点
履修上の注意		テキストの例題および章末の演習を必ず行うこと。	
教科書		山口昌一郎「基礎電磁気学」電気学会	
参考図書		山田直平、桂井誠「電気磁気学」電気学会 後藤憲一、山崎修一郎「詳解電磁気学演習」共立出版	
自学上の注意		教科書の例題、問題を自分で解くこと。	
関連科目		基礎数学 I, II, 微分積分 I, II, 電気回路 I, II を基礎とし、電磁気学 II に発展し、電気機器、電子工学、通信工学等の専門科目の基礎となる。	
総合評価		達成目標の(1)~(3)について4回の定期試験と課題で評価する。 総合評価 = $0.8 \times (4 \text{ 回の定期試験の平均}) + 0.2 \times (\text{課題点})$ 。 総合評価が60点以上を合格とする。再試験は定期試験の平均が30点以上で課題を提出している者に対して行う。	
			【総合評価】 点